

小さな子どもが近づいてきて「なつかしいおと」つぶやいたことがある。見たことも聞いたこともないロバの楽器や音楽を耳にして。音楽は忘れてしまった遠い遠い記憶をよみがえらせてくれる。それは、ほのかに湧きあがる懐かしいという感情。ふと何かに気づいたり、たくさんの自分(細胞)が暴れだして、勇気や希望を音楽によって授かる。舞台から鳥や木々や星空が奏でる森の音が聞こえる。

ロバの音楽座は今から三十年前に生まれた。それからさかのぼること十年前、一九七三年当時あまり演奏されていなかった(いや今も?)中世・ルネサンス時代の古楽器を演奏するカテリーナ古楽合奏団を結成した。ちょうどその頃、日本では古楽ブームという風が吹きまくり、というよりそよ風のような静かなブームが音楽界に起きていた。これとは対象的にバブルという巨大なタイフーンは日本中に猛威をふるい、美しくてやさしい自然の音や、道端であそぶ子どもたちの歌声をものみこんでいった。経済中心の歯車への違和感は、自然感あふれる森の音楽への憧れへとつながった。カテリーナ古楽合奏団の音楽は、西洋の音楽なのに西洋の音楽ではなかった。それは東方の影響の濃い中世音楽の特徴でもあった。クラシック音楽でも民族音楽でもないどこか懐かしい西洋古楽は、ヨーロッパの人々の記憶から一度消えさってしまった霧の中の音楽として楽器だった。このこ

# 子どもたちと 音さがし ロバの音楽座の こころみ

松本雅隆

saryu matsumoto



とは僕にとって、誰からも束縛されず自由な感覚で音楽を表現できる格好の理由であり、格好の道具となった。

カテリーナ古楽合奏団から約十年後、一九八二年子どもたちのためのグループ「ロバの音楽座」を結成した。以来ずっと子どもたちと共に音をさがすことになった。結成当時から中世・ルネサンス時代の古楽器が柔らかな音色を奏ではじめると、まるで魔法にかかったように子どもたちがステージに釘づけになり、たちまち赤ん坊は泣きやみ、音に反応して笑ったり歓声を上げた。古楽器に加えて民族楽器やオリジナル楽器「空想楽器」も加わり、時には仮面劇も交えて展開するステージは、子どもたちだけでなく大人たちも、すっかり「音とあそびの世界」に引きこまれていた。ロバの音楽座の音楽や舞台づくりは、中世・ルネサンスの音楽や楽器から多くのヒントやアイデアをもらっている。一つは、当時の音楽家は演奏家であり、作曲家であり、歌手はたまたダンサー、役者……と多芸多才なマルチパフォーマンスかつ即興演奏の達人だった。ロバはこれにあやかっていた。もう一つは、空想楽器を創作する上で、昔の楽器や民族楽器にはたくさんのヒントが隠されていた。そして、身の回りのものは何でも楽器になるということも。

ロバの音には、古代的な伴奏「ドローン」を使った楽曲が数多く登場する。演奏している楽器の中には、バグパイプ、

ハーディガーディ、サズなどドローン向きのものがたくさんある。ドローンとは、例えばドの単音やドとソなどの複数の持続低音が旋律を支える伴奏のこと。世界の民族音楽やルネサンス以前の音楽によく使われる伴奏スタイルだ。子どもたちにとって、和音による音楽よりもドローン音楽は、即興的な音楽を作ったり、音を自由にあそぶことのできる、正に「間違えない音楽」なのだ。このドローンで味付けされたプリミティブなロバの音楽の音色を、子どもたちは無意識に嗅ぎわけ、心地よさや懐かしさ、そして新しさをも感じとっているのだろう。古楽器は現代人の感覚ではかると大変不便なものかもしれない。気温、湿度に影響しやすく音程が不安定、音域が狭い、演奏できる曲に限られる、オーケストラには入れない、それぞれの楽器の個性が強い、などなど。しかし、このわがままで足りないものだらけの昔々の楽器と長年向きあい、それぞれの楽器との付き合い方を会得すると、現代の楽器が失った、楽器本来のステキな姿が見えてくる。素朴さも含めて全てのマイナスの要素は、そのままプラスの要素として置きかえられていく。演奏する曲が限られているからこそ独特な音楽が生まれ、オーケストラに入れないから仮面劇など愉快なロバスタイルが生まれる。それから数年ごとに買いかえを迫られる電子楽器と違って、森から生まれた不ぞろいの楽器たちは、大切に使

松本雅隆（まつもと・がりゅう）

中世・ルネサンス時代の古楽器を演奏する「カテリーナ古楽合奏団」、子どもたちのためにファンタジックな舞台をくりひろげる「ロバの音楽座」（第3回キッズデザイン賞・創造教育デザイン部門金賞受賞）、音楽の原点を子どもたちと体験する「ロバの学校」を主宰。世界各国の古楽器を研究するとともに、数かずの空想楽器を製作。



えはきつと五百年以上は使えるだろう。  
 コンサートでは、ただ椅子に座って演奏することは滅多にしない。移動しながら演奏したり、時にはドラマのような仕草を演じながら演奏する。使用するそれぞれの楽器は、いろんな国のいろんな生活の場面から生まれた楽器たちなので、ただ座って演奏するわけにはいかない。突然、長い古代のラッパと鐘の不思議な行進が始まる。子どもたちはその現象を見て聴いて、想像の羽を徐々に広げる。僕たちは一つの意味を伝えようとはしていない。動きながら演奏することで、彼らにそれぞれの楽器の持ち味や生活の中の音楽の役割を、より一層リアルに伝えることができる。石ころを使って音の会話が始まる。この石の会話も百人の観客がいれば百とおりのストーリーが生まれるだろう。これがロバスタイルのパフォーマンス。歌の曲もたくさんあるが、言葉あそびのようなナンセンスな歌詞が多い。日常の中でいつも新しい出会いや経験をしている子どもたちは、大人よりも、予測される展開をあまり好まない。むしろはぐらかされたりハテナが多いことを好むようだ。  
 不思議な形をした森の楽器や空想楽器を手にして演奏する僕たちを、子どもたちはじっと見つめている。どんなことを想像しているのだろう。知らない町をさまよっているのかな。それとも雲の上を冒険しているのだろうか。